

2019年5月26日(日) 西田浩子牧師 説教

聖書：ヨハネの手紙Ⅲ 1-8 説教：キリストに似る者の生活

「百聞は一見に如かず」ということわざがあるが、南町田教会の本当の魅力を知ってもらうには 実際に来て見ていただくのが一番であろう。一本の木の原木からそのまま切り出し、特注で作られた講壇、そして、その講壇の後方に大理石の壁、壁の光によって照らされた十字架。それらすべては荘厳そのものである。教会建築物も宗教芸術のように人間の感性に訴えかける。人間が心を落ち着かせるためには礼拝を通して与えられる神の恵みと平安を得ること。人間の理性と感性は、五感の経路を通じて、精神と体、霊によって認知することができる。教会はいつも元気で豊かな想像力を培うその力を持つために、常に新しく生まれ変わることを神に祈り続けることが大切である。キリスト教的愛の働きとして、南町田教会では内なる共同体としての南町田教会 (Church Within A Church)を形成する礼拝、教育、交わり、伝道のわざ。そして、教会の外に対しては地域と共にある南町田教会 (Church alongside the church)、 「地域に認められる教会」、 「地域社会に仕える教会」として、光と塩の役目を担って前進し続けて来た。創世記 1:26 「神は、われわれにかたどり、われわれに似せて人をつくろう」 神様はご自分に似た者として私たちを造られた。別の訳の聖書では、次の 27 節に「神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造した」。とある。繰り返して「わたしのかたち」「神のかたち」と言われている。人間が似るべきものの一つは親であろう。そしてもう一つ人が似るべきものが「神様」である。自分を

振り返って神様のことを感じさせるような性質、性格、品格等が自分自身にあるだろうか。

創世記に記されている通り本来人は神様によって造られ、神様のご性質に似たものとされた。この創られた人は、はじめエデンの園に置かれた。教会と世界は、キリストの十字架の愛のゆえに、エデンの園のようなものとされた。今朝の御言葉を記したヨハネは、このエデンの園のようなところに住むガイオに「愛する者よ」と呼びかけている。ヨハネの手紙Ⅲは、「長老」ヨハネから「愛するガイオ」に宛てて書かれた私信（個人的な手紙）。

「わたし」と「あなた」との関係を基軸としながら、その他の人物が交流または対立している様子が描かれている。ヨハネの手紙Ⅲ1「長老のわたしから、愛するガイオへ。わたしは、あなたを真に愛しています」。教会の指導者からは、こうした牧会的配慮が各教会に寄せられ互いに支え合い共に立つ教会の心と心のつながりがある。2節「愛する者よ、あなたの魂が恵まれているように、あなたがすべての面で恵まれ、健康であるようにと祈っています」。

ここで三つの祈りが述べられている。一つ、あなたの魂が恵まれているように。二つ、あなたがすべての面で恵まれるように。三つ目あなたが健康であるようにと祈っています。である。

「あなたの魂が恵まれているように」を別の訳では、「たましいに幸いを得ているように」とある。「幸い」と訳されている言葉は、「順調な旅をする」という意味から来た言葉である。長老ヨハネにとって、ガイオは信仰の子であって、教会は離れていてもヨハネ

はガイオの魂への配慮を欠かすことがなかった。わたしたち人間にとって「心」のあり方はとても大切である。心が信仰によって健全であるならよりいっそう神の栄光のために励むことができる。「神を愛する者たち」は信仰者のこと。信仰をもって生きるとは、神を愛して生きることである。良い行いに励むことが信仰なのではない。信仰者が神を愛するのは、神が、愛される資格のない罪人である自分を愛して下さり、キリストの十字架の死と復活によって罪を赦し、神の子として下さったからである。子とされた私たちが、父となって下さった神を愛するのである。そして神を愛する私たちは、神の御心が自分の上に、教会に、この世に実現することを願い求める。ヨハネは「ここに愛があります (Iヨハネ 4:10)」と言った。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました」と言っている。大切なポイントである。聖書が語る「愛」と「罪」の違いは何であろうか。愛は隣人を喜ばせることであり、罪は自分を喜ばせることである。3-4節「兄弟たちが来ては、あなたが真理に歩んでいることを証ししてくれるので、わたしは非常に喜んでいますが、あなたは真理に歩んでいるのです。自分の子供たちが真理に歩んでいると聞くほど、うれしいことはありません」。「自分の子供たち」というのは、ヨハネが伝道した霊の子供たち、信仰の教え子たちのこと。その人たちが皆、真理に歩んでいる、横道にそれたり、挫折したり、この世を愛して神さまに背を向けたりすることなく、示された御言葉に従って、歩んでいるということを知ることほどうれしいことはありません、というのである。

「真理」という言葉は、ヨハネの手紙には何回もでてくる。第一ヨハネには10回、第二ヨハネに9回、そして第三ヨハネには5回。この「真理」という言葉は、キリストの十字架の言葉ということである。ヨハネ福音書 3:19-21「光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇のほうを好んだ。それが、もう裁きになっている。悪を行うものは皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光のほうに来ないからである。しかし、真理を行う者は光のほうに来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために」。ニコデモは光を求めて、真夜中にイエスのもとを訪れ夜の来訪者から白昼を歩む者へと変えられた。私たちも、己の力により頼む者から、上からの力を待ち望む者に変えられ、また聖霊の働きを傍観する者から、その風の中に自らを置く者とされて、新しく生まれる者、闇の中では、光の中を歩む者とさせていただきたいのである。

私たちは普段、毎日の生活の中でどのような喜びを求めているだろうか。私たちが心から喜ばせているものとはいったい何であろうか。教会の礼拝と祈祷会で多く祈ることは、勉学や職場でのこと、また病気の方が癒されるようにということであろう。そしてその実現は確かに大きな喜びを与える。しかしイエス様の祈りには、それに似たような課題が出てくることがない。つまり、イエス様は私たちにこれらの事柄とは全く違った喜びを準備しておられるのである。5節をみるとヨハネはもう一度ガイオに向かって、「愛する者よ」と呼びかけ、その善い行いに対して、「あなたは、兄弟たち、それも、よそから来た人た

ちのために誠意をもって尽くしています」と賛辞を与えている。「よそから来た人たち」は巡回伝道者たちのことで巡回伝道者たちはガイオのもてなしぶりをこの手紙の著者であるヨハネに報告した。それは愛に基づいたもてなしであり、神に喜ばれるものであった。

6 節「どうか、神に喜ばれるように、彼らを送り出してください」。別の訳で「あなたが彼らを、神にふさわしい仕方で送り出してくれるなら、それは立派な行いです」。ガイオは旅人、巡回伝道者たちをそのような振る舞いで送り出した。この「りっぱな」ガイオの働きをヨハネは「美しい」と讃えている。当時は旅館やホテルが整っていた時代ではなかったため旅人をもてなすことは現代以上に必要なことでありガイオはそれを喜んで行った。7 節「この人たちは御名のために旅に出た人」とあるが、彼らは各地の教会を旅しながら伝道する巡回伝道者であった。コロ 3:23「何をするにも、人に対してではなく、主に對してするように、心から行いなさい。」

キリストの御言葉が伝えられていくためには、伝える人(伝道者・宣教師)とその人を支え送り出す人(支援者)の二つの輪「two sides of a coin」が必要である。ガイオのように外に出ていく人たちの働きを陰で支えることもまた立派な伝道の働きであり、まさに真理のために働く同労者(協力者)となることなのである。また、パウロは、「私たちは神の同労者である」(一コリ 3 : 9 口語訳)と言っている。私たちは毎日曜日に共に集まって神様に礼拝を捧げているがこれも伝道の働きである。礼拝に集まる人々に、キリストは今も聖霊を遣わしイエス様の喜びで満たしてくださるのである。このイエス様の捧げられた祈りがある

からこそ、私たちが今捧げている礼拝は、イエス様がいる場所へと変えられる。伝道者は礼拝の中でキリストの御言葉を伝える。すべての人が牧師、伝道者のようにして出て行くということは難しい。しかしそのような働きをする人を喜んで迎え、もてなすとき、神様に喜ばれる伝道の働きに加わることができる。それが8節の「真理のために共に働く者」である。ヨハネ 14:17「この方は、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである。」

各人が聖書を手にする事の出来ない時代、讃美歌も無い時代に、キリストの御言葉は、兄弟、姉妹による口伝の証しによって宣べ伝えられた。何が伝えられたのか。それはイエス様が私たちのために十字架に架かれ、神様との関係を取り次いでくださった事である。祝福と恵みが、今いるこの場所にも与えられている事を教会の中で伝えあってきたのである。